

インクル

"Incl." by The Accessible Design Foundation Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

137
2022 (令和4) 年
3月25日号

特集 「誰一人取り残さない」を考える



Contents

【本の街で、こころの目線を合わせる】		「誰一人取り残さない」いちばんの近道って、なんだろう？	10
神保町ブックセンター オンラインイベント	2	キーワードで考える共用品講座第127講	11
こころの目線を合わせたその先	4	「共遊玩具」「共用品・共用サービス」の普及に向けて	12
劇団「フライングステージ」	5	「誰一人取り残さない」を考える本	14
本を聴く「オーディオブック」	6	杉並区民生委員・児童委員への調査報告書	15
アクセシブル・ボックス・サポートセンター設立に向けて	7	事務局長だより	16
NPO法人ハイヒール・フラミンゴ	8	共用品通信	16

【本の街で、こころの目線を合わせる】12月17日 神保町ブックセンター オンラインイベント
気がつけば4分の1が、障がいのある社員になっていた?!

ユニバーサル農園「京丸園」「めねぎ農園のひみつ」を教えます 誌上再現



鈴木厚志氏 (左)、絵本『めねぎのうえんのガ・ガ・ガーン』(右)



星川…今日は絵本『めねぎのうえんのガ・ガ・ガーン』(合同出版)の舞台、京丸園の鈴木厚志さん、緑さんと、絵本作家の多屋光孫さんを、神保町ブックセンターのイベントにお招きしお話をうかがっていきます。

障がい者との出会い

厚志…京丸園の鈴木厚志です。400年近く浜松の地を耕してきた農家の13代目です。農園を拡大させるために、求人を出したところ、応募されたのが障害

のある人たちでした。僕は、障害者は農業で働けないと思っていたので、お母さんと来られましたが、履歴書の封も開けないで「無理だと思えます」と言つて、履歴書をお返ししました。お母さんは「なんとかお願いできないか」最後には「給料は足りないから働かせてくれ」と言われたんです。僕はその当時30歳、その言葉の意味がわからなかつたです。仕事は金を稼ぐためと思つていたので、お母さんのその意味がわからなかつたのです。その言葉がずっと引つかなかつていたので、福祉関係の友だちに聞いてみると、「『この世に無駄な人は一人もない』って聞いたことあるか」と尋ねられました。「無駄じゃないと思うよ」と話したら、友だちは「お母さんはそれを信じてるんだよ」って。障害を持つて生まれきてても、きっとこの子に役割があるんだと信じている。だから断られるのは承知で、なんとかチャンスを与えないかと回つ



鈴木緑氏

ていると教えてくれたのです。僕はそれを聞いた時に、自分が働くということを真剣に考えてこなかつたことに気づいたので、それが彼らとの出会いで、障害を持った人たちやそのご家族との接点が生まれました。そして、それが今回このようななかたちで絵本になつていくきっかけとなりました。

絵本に

緑…厚志の妻です。この絵本の中には『ウォーリーをさがせ!』みたいな、ちよこちよこつと登場しています。私は日々農園の雑務仕事をしています。京丸園のことを絵本にするお話を、お電話でいただいた時に即答しま

した。まさかそんなことと思いつつ、半分は嬉しくてそうなるといいなと思つて、即答しました。その時に星川さんから「社長の返事を聞かなくていいのですか」と聞かれたんですが、「大丈夫、社長はもうOKだから」と(笑)。

多屋…多屋光孫と申します。絵本作家で挿絵画家です。今回の絵本の文と絵を担当しました。去年の『ゆうこさんのルーペ』に続いてこれが2冊目です。

京丸園

厚志…障害を持った人たちと27年前に出会い、農場の仲間になつてもらつたおかげで、当時は家族10人でやっていた農園が、今は100人が働く農園になりました。障害を持った人たちが働ける現場を作つてきたら、高齢の人たちも、女性も働きやすくなり、若者たちもまた入ってくるようになり、多様な人たちが一緒に働けるようにな

りました。その辺りの話を、うちの総務を担当している女房に振りりたいと思います。

緑…補足をさせていただきま
す。私たちは家族の農園だった
のが、絵本にあるように、特別
支援学校の生徒さんを先生が連
れてこられて、いろいろなこと
が変わっていきました。けれど
も初めからうまくいったわ
けではありません、こだわりの
強い人は自分が納得するまで何
度も説明を聞き直してきます。
その時はなぜそうなるのかわか
らず先生に聞いて対応するの繰
り返しでした、それが今では、
本当にいろんなさまさまな人た
ちが農園で働いてもらえるよう
になってきています。

星川…ありがとうございます。
多屋さん、高校での授業の様子
をお聞かせください。

多屋…都立工芸高校で、先生が
国語の授業で、この絵本を読ん

で下さり、生徒たちの感想文を
いただきました。抜粋して読ん
でみます。多かったのが、「人
を仕事にはなく仕事を人に合
わせるということに共感した」
という生徒さんです。「やっぱ
り人を見ただけで決めるのはよ
くない」とか、あとは高校生な
ので、部活とかアルバイトを
やっている時に、先輩に指導を
する時「同じことをやってた
なあ」というのが多かったです。
その他にも、「僕がこの作品を
読んで感心したのは、鈴木さん
のすばやさでした」「私も先生
のような心がきれいな人になり
たいです」「この本を読んで思っ
たことは、発想や考え方を変え
てみることで、世の中が変わる
ということですよ」などの感想が
ありました。

ユニバーサル農園

星川…次に、ユニバーサル農園
について教えてください。

厚志…障害を持った人たちが農

場に来てくれることで、農業の
弱点に気づくことができます。
今農業人口がどんどん減って、
「有休農地」という耕されない
農地が増え、これからの日本の
農業をどうしていくのかという
課題に直面しています。

その現状の中で農業の弱点を
知ることができて、なおかつ障
害を持った人たちが働けるよう
にしていくと、いろんな変化が
起こっていくと手応えを感じる
ようになったんです。そのため、
NPOを作って、ユニバーサル
農業や農福連携というものをい
ろんな人たちに知ってもらおう。
障害を持った人たちのためとい
うよりは、「農業を強くする」と
いうキーワードで取り組んでい
ます。

星川…1つの農家だけではなく
て広がり重要ですね。海外か
らもあるんですか？

厚志…おかげさまでユニバーサ
ル農業や農福連携という、「農
業」と「福祉」の連携は世界の
問題でもあって、世界の農業を
どうしていくかにもつながるん
です。世界にもやはり障害持っ
た人たちがいて、各国どこにも
福祉の問題がある。その中で農
業と福祉を連携させることに
よって、もっとおもしろいこと
ができる。みんなが思うおもしろ
さは、世界でも同じようです。
今この取り組みに24カ国の人た
ちが関心をもち、京丸園を訪れ
てきています。国内だけでなく、
多くの国とも連携できたらよい
と思っています。

星川…すばらしいですね。この
絵本も多くの国で翻訳されると
いいですね。ありがとうございます。



多屋光孫氏

こころの目線を合わせたその先

神保町ブックセンター ながれきんや 永礼欣也



神保町ブックセンター

神保町ブックセンターのイベント会場は満席でイベントの始まりを楽しみに待っている方で溢れかえっていました。2019年8月23日『本の街で、こころの目線を合わせる』イベント第1回目は満席御礼で開催されました。

このイベントは当事者以外にはなかなか伝わらない悩みを抱えての暮らし、その日常を「本」を通じて発信する当事者や支援者、専門家の方々をお招きし、彼らの悩みや感じている事、専門的な知識などに耳を傾け、参加者と共にこころの目線を合わせ

て、誰もが暮らしやすい社会を目指してはじめてイベントです。

神保町ブックセンターは旧岩波ブックセンター跡地にできた書店と喫茶店と仕事場を兼ね備えた複合施設で、神保町という長い歴史のある本の街で、「本と人との交流拠点」をコンセプトに開業し、ひよんなことから共用品推進機構の星川安之さんより、様々な悩みを当事者がマンガを通じて発信する本を出版している合同出版さんの坂上美樹さんを紹介いただき、イベントの目的がお店のコンセプトにも合っていて、3者の合同でイベントの企画が始まりました。

気付けば2年4カ月で20回開催し、1036名の方々が参加してくださいました。

参加者の反応

イベントはトーク形式で当事者×専門家や支援者など双方の聞きたい事や価値観を発信できるようにこれまで様々な方に

登壇いただき、絵本作家による絵本の朗読や当事者自身のアト作品の紹介、芽ねぎの栽培の実演など、色々な手法で発信してきました。



トークイベント

私が驚いたのはイベント参加者の半数以上は当事者ではなく、当事者の家族や友達など身近にいる方の参加が多かった事です。「普段自分が接している事が間違っていないかったんだ」や「こういう事考えているんだ」など、身近にいるからこそ、自分事として考えている方が多く、イベントの最後の質疑応答では質問が続出し予定時間をオーバーする事もしばしばです。

コロナ禍に入ってからオンラインでも開催することになり、今まで参加できなかった遠方からの参加者もいらして、より当事者の声が遠くまで届くようになりました。

『知る』から『行動する』へ

昨今、自らを発信する手段はSNSを中心に様々なツールがあります。コロナ禍でオンラインが日常化されイベントを通じて、たくさんの方々に参加いただき、情報の発信を行っています。これからは興味がない方向にどう知ってもらおうかが課題です。

誰一人取り残さない社会をつくるためには、少しでも多くの方に知ってもらおう事が重要で、知る事により、何をすれば共に暮らしやすい社会が実現するか、実現に向けて行動に移す一歩が踏み出せると思います。こころの目線を合わせたその先には、その一歩を踏み出せるように本とイベントを通じてこれからも発信していきます。

劇団「フライングステージ」

関根信一せきねしんいちさんが代表を務める劇団フライングステージの二本立ての演劇を観たのは昨年6月、「Pinkピンク」は、ピンクのランドセルを欲しがるとナリタ子の話、「アイタクテとナリタクテ」は学芸会で人形姫の役を演じたい男の子の話でした。

きっかけはコーラスライン

1992年、当時20代後半の関根さんが、劇団を発足させたのは「府中青年の家事件」の裁判を傍聴したことでした。同性愛者の団体に対し、都が「青年の家」の利用を拒絶した事に対して同会が起こした裁判です。

関根さんは、自分の性に対し違和感を感じ、女性っぽい振る舞いに、小中学校ではいじめの対象となりました。早く中学を卒業し進学校に行けばいいとは思わなくなり、受験勉強は深夜まで及びました。深夜ラジオで、ミュージカル「コーラスライン」を知り、受験勉強の合間をぬって日生劇場でみた「コー

ラスライン」は、関根さんの人生を変えることになりました。このミュージカルでは、俳優になるためのオーディションの場面があり、応募者の一人が、ゲイであることを告げる場面がありました。ゲイであることを他人に伝えたことのない関根さんにとつて衝撃であったと共に、いつか自分も演じる立場になり、ゲイであることをオープンにしたいと思ったのです。

裁判の傍聴

高校では、演劇部に入りのめりこみ、卒業後も多くのミュージカルや演劇に出演しました。しかし、ゲイであることをカミングアウトするには至りませんでした。20代後半になり、限界を感じ始めていた丁度その時に、ニュースで知った「府中青年の家事件」の裁判を傍聴したのです。小さな法廷の傍聴席には、不当な事件に抗議するために、自分と同じLGBTの人達が、LGBTであることを隠さずに

いたのです。そこで出会った人たちは、94年8月28日に、日本初の東京レズビアン・ゲイパレードを開催した南定四郎みなまてしろうさんと繋がっている人たちでした。南さんたちには、演劇を通じて社会に伝えたいことがあるとの思いで、劇をおこなうための劇団名「フライングステージ」がありました。しかし、演劇に精通している人がいなかったこともあり、名称だけがある状況でした。その劇団名に、息を吹き込んだのが関根さんだったのです。それ以来、劇団フライングステージの作品の台本は、関根さんの手で作られ、数多くの作品が上演され、多くの人の偏見や思い込みが消えていっています。

演劇は社会の鏡

冒頭で紹介した私が見た二本の作品「Pinkピンク」と「アイタクテとナリタクテ」は、私の中にあった思い込みや偏見を見事にとりさつてくれました。2つの作品とも、声高に「差別反

対!」「偏見撤廃!」とは、一言も言っていない。劇は、現在の社会を鏡として伝えることで、伝えることができる、関根さんは言います。社会で何が行われているかに気づいてもらい、どうしてその状態になっているかを知ってもらう、その後、その課題をどう考え、そしてどう行動に移すかは、劇を見てくれた人に委ねているのです。人が動くのは、金を積まれた時や、脅されている時ではありません。人が動くは、ただ一つ「心が感動した時」です。そのことを、関根さんの劇は、教えてくれます。関根さんは、劇団に息を吹き込むと同時に、自らゲイであることをカミングアウトし、社会とLGBTとを、演劇を通じて結んでくれているのです。

星川安之



「フライングステージ」チラシ

本を聴く「オーディオブック」

オーディオブックとは、書籍

を音で提供するもので、読む本

ではなく「聴く本」。スマホに専

用のアプリをダウンロードし、

聞きたい本を選べばすぐに使う

ことができる。聞こえてくるの

ことは、AI技術で合成された音声

ではなく、声優の人たちの声だ。

購入する前に、2分ほどの試し

聞きができるので、購入後の失

敗も少ない。読み上げるスピー

ドは、4倍速まで設定できる。

通勤・通学中はもちろんの

こと、ランニング、料理をしな

がらでも本を聴くことができる

便利なサービスだが、今回は、

audiobook.jpを通してオーディ

オブックを提供している(株)オ

トバンク会長、上田渉氏に話を

伺った。

失明したおじいさんのために

上田氏がオーディオブックを

始めたのは、自身のおじいさん

が緑内障で失明していたから

だ。駅伝、スポーツなど、テレビ

で放送される番組を耳で聴いて

いたという。子供のころ、おじい

さんの書齋で見た埃の積もった

本、大きな虫眼鏡。完全に目が

見えなくなるまで、活字を読も

うと闘っていた姿をそこに見た

上田少年は、おじいさんのため

に何かしたいと思った。

オーディオブック成功の秘訣

上田氏は、学生だった2004

年にオトバンクを設立した。「そ



あなたのライブラリ



頼られるリーダーになろう



「audiobook.jp」のアプリ

のころ主流だった携帯電話が小

型化パソコンへと進化すること

も、通信速度が速くなっていく

ことも予測していたので、機器

に関する課題は時間が解決する

と考えた。オーディオブックに

ついて、無理だからやめておき

なさい、と多くの人にたしなめ

られても、熱意をもってロジッ

クを考えたことが成功の秘訣

だったのではないかと上田氏

は言う。会社の経営も、夢のよ

うにふわつとしたものではない。

自ら価値を生み出す人を採用す

るため、理念の共有と達成の道

すじをはっきり示し、社員が課

題をもって切磋琢磨する環境を

作っているそうだ。また、定時無

し・コアタイム無しのフルフレッ

クス制を導入し、通勤ストレス

をなくすため、「満員電車禁止

令」を敷いている。

広がるユーザーや用途

どちらかというと情報が届き

にくい高齢者層のユーザーがこ

こ数年で増えているのも、オー

ディオブックの認知度が上がっ

たことの表れだという。目の不

自由な人のために始めた(株)オ

トバンクのオーディオブックは、

障害のない人の間で広がってい

る。これは、障害のある人の専用

品として出発した電動歯ブラシ

や温水洗浄便座といった共用品

と同じだ。一般の人たちの間で

話題になれば、障害のある人に

も情報が届きやすくなる。

新型コロナワクチンを接種し

た翌日、副反応の発熱で寝たり

起きたりしていた知人は、オー

ディオブックから流れてくる小

説の声に癒されたという。シニ

ア層に入る友人が「近くが見え

にくくなった目をこらして活字

を読んでいると血圧が上がって

困る」というので、オーディオ

ブックを勧めた。これで健康診

断の血圧測定を心配しなくてよ

くなったと喜んでる。

オーディオブックのユーザー

と用途は、まだまだ広がりそう

だ。

かなまるしゆんこ
金丸淳子

アクセシブル・ブックス・サポートセンター設立に向けて

ABSC 準備会座長代行 おちあいさなえ 落合早苗

2019年6月、視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律、いわゆる「読書バリアフリー法」が制定され、同月のうちに施行されました。

出版業界では、翌2020年7月に日本書籍出版協会にアクセシブル・ブックス委員会（AB委員会）を新設。また昨年9月には、AB委員会と連携する形で、日本出版インフラセンター（JPO）に「アクセシブル・ブックス・サポートセンター（ABSC）」設立に向け、ABSC準備会を立ち上げました。

施行から2年半。基本方針として示されているアクセシブルな電子書籍の普及促進は、残念ながら進んでいるとは言えない状況です。

ABSC準備会では、①出版社に対する情報提供、②電子書籍の自動音声読み上げ（TTS）対応促進、この二つの指標で出版業界に呼びかけていこうと考えています。

昨年12月には、出版社向けに

説明会も開催しました。

出版社に対する情報提供

日本国内の出版社数は、現在約3000。うち、JPOの「出版情報登録センター」を利用している出版社は、約2300。ABSC準備会では、この2300社に対して、アクセシブルな読書環境の整備に向けて、出版社に期待されている役割や、障害者団体の取り組みに関する情報を、冊子とウェブで提供していきます。

また、印刷用データからアクセシブルなデータを抽出するための手間や費用の負担をいかに軽減できるか、提供したデータが目的外に流用されてしまうのではないかとの不安をどう解消するかといった、諸課題の解決に参考となる情報もレポートします。

このレポートは、障害者団体／障害者支援団体や図書館などにも送付します。希望があれば、テキストデータの提供もします。

す。

電子書籍のTTS対応促進

法案成立後、基本方針として示されていたのが、電子書籍のTTS対応です。

日本国内の電子書籍は、数え方にもよりますが、すでに100万冊を超えたと考えられます（正確な統計データは存在しません）。すでに市場に流通しているもののうち、21万冊程度は、出版社とサービス提供者との合意があれば、TTSに対応できます。まずはこれを進めていきます。

それ以外のものをどうしているか、あるいはすでに流通しているものでなく今後製作される電子書籍を、よりアクセシブルなものにするために何ができるのか、といったことも研究し、広く共有していきます。

2022年1月からは、JPOが運営する本の総合カタログサイトBooksにおいて、電子書籍やオーディオブックの表

示も出はじめました。来年度中には、このサイトそのものもアクセシブル対応する予定で、どこの本が市場で手に入るのかをガイドする役目を担います。

ABSC座長代行という任に就いて、私自身、視覚に障がいのある方と接する機会が増えました。件のレポート向けの取材で点訳現場を訪れてABSC準備会の活動について話したところ、「（視覚障害者等向けに）どんな本があるのか、わかるだけでも嬉しい」という感想が返ってきました。晴眼者の私にとってはあたりまえの情報ですが、彼らに届いていなかったという実態に、少なからずショックを受けました。はじめの一步を踏み出すことが大切なのだ、励まされたように思います。

課題は山積みしていますが、一つひとつ整理し、関係者、関係団体の知恵を借りながら対応していきたいと考えております。

NPO法人ハイヒール・フラミンゴ

川村義肢株式会社(大阪府大東

市)は、戦後すぐに義肢・装具を開発・販売する会社として設立されました。義肢・装具の役割は、立つ、歩く、持つ、握るなどですが、目標はその人が望むことができるようになることです。そのため、同社は、福祉用具にも事業範囲を広げ、本社入口には、シヨールームを設置。多くの福祉機器・介護用品が展示され、体験



体験コーナー

もできるようになっています。

そこで相談員として、さまざまなニーズに答えているのが野間麻子(あさこ)さんです。野間さんには、もう一つ、仕事で出会った仲間と作ったNPO法人ハイヒール・フラミンゴの代表という顔があります。

ハイヒール・フラミンゴ

同社が2017年に始めた「義足でやってみよう!」というイベントは、それまで交流が少なかった義足の人同士が情報交換する貴重な場でもありました。参加者の一人である高校教師の高木庸子(たかきようこ)さんは、悪性軟部肉腫で片足を切断しなければならぬ時、人づてに紹介された義足の教師からの「必ず教壇に戻ってきてください、できたらかっこいい短パンで」という言葉で、前に進むことができま

した。「足を失っても自分らしくあるために、好きな服を着て、好きな靴を履いて、そしてもう一度教壇に立とう。今ままで一番素敵な靴を買おう。」そんな思いを抱いて切断後、義足で向かった店で購入したのは、ヴィトンのハイヒール。卒業式で生徒の名前を呼ぶ彼女の足には、そのハイヒールが輝いていました。

「義足の女性に会いたい」そんな思いでイベントに参加した高木さんでしたが、女性の参加者は極端に少なく、事務局の野間さんに相談しました。野間さんは、同社で義足を作った女性を対象とした「女子会」を企画。18年6月9日、第1回の義足の女子会が開催されたのです。会場は、華やかな飾り付けが行われ、心地よいジャズ音楽が流れる中、アロマの香りが参加者を迎えました。参加者は、初めて会った人同士にも関わらず、

終始笑い声が絶えない、心が通じ合う時間を過ごしました。そして、いつしか自分たちでも気づかなかった心の澱(おり)を、きれいに



メンバー

吐き出せる場所になっていたので。この会で満場一致で決めたのが「ハイヒール・フラミンゴ」という会の名称でした。

会のロゴマーク

女子会のこれからの活動の形を模索していく中、転機となったのは日本女性学習財団が募集している「未来大賞」への応募でした。義足ユーザーの高木さん、義肢製作者の青木千佳(あおきちか)さん、義肢事業推進を担当している松井由起子(まついゆきこ)さんと野間さんが、それぞれの思いをオムニバス形式で書いたレポート

は、見事、大賞を受賞したのです。しかも、審査員の一人を通じて紹介された動物カメラマンの方より、アフリカの湖から今まさに飛び立とうとしている片足のフラミンゴの写真をロゴマークにしてプレゼントしてもらえたのです。



フラミンゴマーク

広がる夢を一つずつ

毎月開催されている交流会「フラミンゴ・カフェ」は、義足の女性たちが抱えてきた思いを打ち明ける場であるだけではなく、夢を叶える場でもあります。

「京都を着物と草履で歩く」、「海岸で足に波を感じる」、「義足にネイルをする」、「春のハイヒールを選ぶ」など、これまでは難しいと



京都を着物と草履で歩く

諦めていた経験を数多く重ねていったのです。

その後、会社の枠に捉われず活動を広げ、より多くの女性義足ユーザーの出会いの場になることを目指すため、NPO法人の設立に向けた準備がスタートします。

フラミンゴとの対面

ハイヒール・フラミンゴの夢はさらに広がります。会のロゴマークにもなった羽を広げて飛び立つフラミンゴを本場ケニアのポゴリア湖に見に行こう！そんな夢の実現に向けて、着々と計画が進められました。しかし、その頃から高

木さんの病は進行していきました。皆の願いも叶わず、20年1月、翌月のケニア行きを前に、高木さんは天国に旅立ったのです。

20年2月28日、昨日までの雨がやみ、ポゴリア湖のほとりには、周囲を埋め尽くし、大空を自由に飛び回る無数のフラミンゴたちの姿がありました。高木さんが遺した義足とあのヴィトンのハイヒールも、仲間たちと一緒にアフリカの大地を踏みしめたのです。



フラミンゴの群れ

これから

22年2月現在、NPOのメンバーは75名、そのうち義足の会員

が13名。コロナ禍でオンラインを取り入れたことも大きく、北海道から沖縄まで会員の輪が広がっています。

高木さんの命は閉じてしまいましたが、彼女が叶えなかった「義足になっても自分らしく、行けるところではなく、行きたい場所へ行ける社会の実現」という夢のバトンは、野間さんをはじめ多くの仲間を引き継がれ、「誰一人取り残さない」というゴールにむかって確実に進んでいるのです。

星川安之



メンバー写真

「誰一人取り残さない」いちばんの近道って、なんだろう？

株式会社ヘラルボニー 代表取締役・CEO まつだ たかや 松田崇弥



松田崇弥氏

私自身が代表を務める株式会社ヘラルボニーは、「異彩を、放て」をミッションに掲げる福祉実験ユニットです。国内外30以上の社会福祉法人の主に知的障害のある作家とアートライセンス契約を結び、2000点以上の作品のアートデータの著作権を管理するビジネスを展開しています。例えば、百貨店を中心に5店舗ほど出店する「HERALBONY」というライフスタイルブランドを展開していたり、日本全国50カ所以上の工事現場の仮囲いをアートミュージアム化していたり、最近ではクレジットカード事業も手がけています。

全てに一貫しているのは「支援」「貢献」ではなく純粋にビジネスとして展開しているということです。今回、機関誌のテーマである「誰一人取り残さない」とは、まさに「尊敬」を生み出していくことなのではないか？と思いました。

突然ですが、10年前の東京駅まで話を巻き戻したいと思えます。尊敬のことを考えていたとき、「東京駅を花でいっぱいにしたい」「東京駅周辺に住むホームレス・徳川国^{とくがわくにあり}有さん^{さん}のことを思い出したのです。私と彼は、大学3年生の頃に出会い、芸術大学に通っていた当時の私は、彼のドキュメンタリー映像を撮影しました。彼がとても面白かったのは、マリーゴールドや、チューリップなど、一体どこから集めてきたのか：膨大な数の種をコレクションしていたことです。しかも、その種を東京駅周辺の道路脇に面した花壇に向けて、ゲリラ的に蒔いていくのです：まさに現代版の花咲か爺さんでした。私は彼に頼み込んで、寝食をともしました。そして、確信したので。彼は「花を植えることを楽しんでる」と。



アーティスト八重樫季良氏（写真左）



異彩を、放て。

ミッション

さて、そこで一つ問いかけてみてください。彼のことを、みなさんは尊敬できるでしょうか？

「ホームレス」という言葉の中には、さまざまな意味が内包されています。もしも尊敬できないならば、一方的にその人物の人格や能力などの格づけに囚われているかもしれません。

これは、まさに障害福祉の世界でも言えることだと考えています。例えば、ヘラルボニーと契約を結ぶ知的障害のある作家の家では、ご両親は作品を「落書き」として考えていました。しかし、ヘラルボニーを通じて「アート」として認められ、街にオフィスに百貨店に作品が掲出されることで、家族や親戚、福祉施設の職員から「すごいね」と褒められるのです。すると、ご両親が自宅の壁に息子の作品を飾り始めました。尊敬がつけられることによって、知的障害のある人が心の底から生きやすくなる。「尊敬」の意義深さに、日々面白さを感じています。

ヘラルボニーは、アート活動をした会社では、実はないのです。この世界を隔てる、先入観や常識という名のボーダーに気づききっかけを提供する会社で在りたい。「東京駅を花でいっぱいにしたい」という、清く美しい特筆すべき感受性に目が向く世の中にしたい。あらゆる人の尊敬を生み出すこと、それが「誰一人取り残さない」本当の社会の実現に繋がると信じています。

「誰一人取り残さない」を考える

日本福祉大学 客員教授・共用品研究所 所長 後藤芳一 ことうよしかず

1. 背景と課題

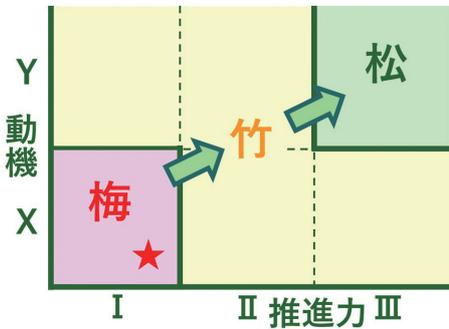
新型コロナウイルスは社会の分断や貧困を際立たせた一方、デジタル化（例：WEB会議やオンライン診療）を7年早めたという。環境対応や第4次産業革命の動きはコロナ前からあった。市場原理・近代国家を科学が後押しするなかで、全体の効率と個々の幸せに背反が生じた。今世紀を迎える頃からその解決が国際課題になった。「誰一人取り残さない」もその一つだ。経済社会は劣化する一方なのか。その反対だ。助からなかった命が助かるようになった、昔も虐げられる人はいて、それに気づかない社会だった。ただ、過去から積み残す課題があり、技術や社会が複雑化して課題が増え、知識や情報を得て気づきが増し、意識（例：人権）が高まって求める水準が上がった。それに対応が追いつかないことが問題だ。

2. 対応策

取組みは広がっている。推進力の強い順に、強制する（I）▽方向を示して誘導する（II）▽自らの

意思で動く（III）であり、動機は、外から（X）と自身の内から（Y）がある。

事例をみよう。①確実なのは外からの強制（XI）だ（図の「梅」）。環境規制（罰則）、株主行動（議決権を行使）、ESG（投資で選別）など。即効性はあるが強い（範囲しか進まない（★印）。②自分の判断（XIIとXIII）や内部の動機（YIとYII）で取り組めばより自律的だ（図の「竹」）。CSRやMDGs・SDGs、標準化（XII）は枠組を通じて進める試み、量産部品の組合せ方によって個別ニーズに対応、ロングテールを見守る（XIII）はモノ作りの工夫、倫理綱領、行動規範・憲



図：対応策の種類

章、LOHAS（YII）は職業倫理やライフスタイルだ。「竹」の領域はソフトローともいう。③隠れた課題に気づき未来の問題を先取りする。それを「竹」や「梅」の手法で解く。それには論理で割りだせないものが見える必要があり、姿勢、感性と磨かれた本能が要る。自らに問い自ら答えを見つける世界だ（YIII、図の「松」）。

3. 共用品の意義

「梅」に必要なのは徹底する力、「竹」には持続するしくみ、「松」には課題を見つける力とその思想性だ。元々「共用品を作ろう」と始めたわけではなかった。利用者の違和感に触れ、その不便さに気づき、なぜかと問い、同じ疑問をもつ人が集まって共用品ができた。新しい課題に気づき、対応につなげた過程が「松」だ。共用品を作ると決めた後で行う作業は「竹」だ。改正障害者差別解消法で、民間事業者による合理的配慮の提供は努力義務から義務になる。これで「竹」が「梅」になる。

松竹梅を決めるのは出口の姿

（提供するモノやサービス）でなく、取組みの内容だ。海外の方法を導入する活動が多いなか、共用品は日本が「松」の役割を担い、世界の「竹」につなげた例だ。

4. さらに先へ

日本では18世紀半ばに「三方よし」、さらに17世紀には暮らしや商業活動と公共をつなげる思想があった。伊藤仁斎、石田梅岩、安藤昌益など。米欧の取組みが市場原理で生じた課題を修正する試み（例：SDGs）であるのに対し、東洋でははるか前から公共を見つけた（15世紀の中国には時の王朝をも「私」とみなす強く普遍的な「公」の考え方があった）。

縦割り（例：脱炭素、人権）にとどまらぬよう、部分最適は新たな課題を作る。取り残さないのは「人」だけでよいか、多様性の分野では生物も対象にしている。人権も遅れぬよう。「取り残す／残さない」は送り手の視点、受け手と共に進めるよう。先達の時代から深い視点を持ってきた我々には、その先を拓く責任がある。

「共遊玩具」「共用品・共用サービス」の普及に向けて

株式会社タカラトミー社会活動推進課

原田由美子

共用品の一つでもある「共遊玩具」の歴史は、今から40年前の1980年に発足したHT研究室の活動から始まります。HT研究室は、創業者富山栄市郎の「誰もが楽しめるおもちゃ」「世の中のためになる企業経営」という遺訓を基に、障害のある子どもたちの玩具を専門的に研究、開発する組織として結成されました。しかし、専用玩具の開発には多くの困難が立ちほだかり、一時は撤退を余儀なくされるところまで追い詰められます。その時、発想の転換を行うことで誕生したのが「共遊玩具」でした。

そして1990年、ついに「共遊玩具」第一号となる「対戦型テトリス」が発売されました。盤面上に凸のポイントマークを付けたリ、ルーレットラベルに、形状に合わせた凹抜きをするといった

ちよつとした工夫をゲーム盤本体に加えることで目の不自由な子どもたちもそうでない子どもたちも一緒に遊べるおもちゃになっています。

その後、障害のある人もない人も共に使えるという考え、理念は玩具業界全体へ、さらには業界や国境を越えて大きく広がっていききました。現在では、この「共遊玩具」開発の活動はCSRという大きな枠組みの中で、タカラトミーグループの社会貢献活動の一つの大きな柱となっています。

しかしながらHT研究室結成から約40年が経ち、「共遊玩具」がタカラトミーから始まったことを知らない社員が多くなってきました。さらに2020年に国内グループ従業員に実施したアンケートでは、約二割の社員が「共遊玩具」自体を知らないということが

判りました。

このことは、「共遊玩具」をつくる上でも影響が出ています。「共遊玩具」として発売するために、適切な気遣いや小さな配慮を企画や開発の早い段階で施していくことが必要になります。これらを意識して商品企画する開発者は現在、ごく一部にすぎません。また、私たち共遊玩具の推進担当者が商品の企画に対して配慮の提案を行うこともあります。商品化のスケジュールに間に合わないこともあり、もう少し早く気が付いていれば簡単に取り入れられた工夫や配慮が施されずに、悔しい想いをしたことも一度や二度ではなかったのです。



小さな凸点

「このままではいけない」

私たちは、先人たちが積み重ねてきた思い、その努力を汚さぬよう「心」を理解して、次の世代にしっかりと繋いでいけるよう活動を守り続けていくために、「共遊玩具」の企業内での情報共有（インナーブランディング）を一から始めることにしました。

「共遊玩具」の開発を促進するための社内ガイドライン「共遊玩具開発の手引き」を作成し昨年から玩具開発に関わる部門を対象に、オンラインによる「共遊玩具開発セミナー」を実施しています。大好きなおもちゃで共に遊べた経験が共生社会の根っこになりうることやユーザーの声などを盛り込み、「開発したい」と思ってもらえるよう「共遊玩具」の役割や意義に気付いてもらえる内容にしています。

また、「共遊玩具の歴史」を、富山幹太郎会長と（公財）共用品推進機構の星川安之さんの対談、当時の資料やイラストで作成した動画で構成したコンテンツを制作



星川安之さん(左) 富山幹太郎会長(右) との対談

し、国内の従業員に向けて配信しています。

コンテンツを視聴した社員からは、「タカラトミーグループで働いていることにやりがいや誇りを感じた」という声や、「活動を次代につないでいく重要性を認識し意識をもって行動していきたい」との嬉しい声が寄せられました。

また「共用品・共用サービス」を自らの業務に活かしたいという声が多様な職種の方から寄せられた一方、業務に活かすためには更

なる知識が必要との意見もありました。

それらの意見に答えられるよう企画したのが、星川さんが講師を務める全三回の「共用品・共用サービスセミナー」です。

第一回の「調査」では、絵本「ゆうこさんのルーペ」の原作者である芳賀優子さんをゲストに、共用品とは何か、様々な調査のこと、コロナ禍での生活の変化、調査する時のポイントを伝え、第二回の「標準化」では、(公財)交通エコロジィ・モビリティ財団の竹島

恵子さんをゲストに、日用品等に施されている配慮のこと。標準化の必要性。ピクトグラムがどのように作られているのかを伝えています。

第三回の「普及」では、共用品推進機構理事の望月庸光さんをゲストに、お客様に楽しんでいただくための様々な工夫や配慮、普及のための施策等を紹介いただきました。

ちょっとした工夫をすることで、誰もが使いやすくなり生活の助けになる商品やサービスを提供



芳賀さんとヤマト運輸のご不在連絡票



ピクトグラムと竹島さん



望月さん(左)と星川さん(右)

できることに気が付いた参加者は多く、「共用品・共用サービスをもっと知りたいと思った」との声が寄せられました。

おもちゃを通じて子どもたちは様々なことを学びます。子どもたちから、お互いの違いを受け入れ、違うのはあたりまえであると理解して育ち、共生社会のすばらしさを学んだ子どもたちが大人になるころ、共生社会があたりまえの世の中になっていると信じています。

共遊玩具はおもちゃ作りを通してタカラトミーグループらしい社会貢献のひとつの形です。そして「共用品・共用サービス」は、「共遊玩具」の活動がひとつのきっかけとなり、多くの業界に広がっている活動です。「世の中のためになる企業経営」を胸にこれからも「共遊玩具」そして「共用品・共用サービス」の普及を目指して活動していきたいと思えます。

www.takaratomy.co.jp/products/kyouyu/

「誰一人取り残さない」を考える本

障害のある人の分岐点

副題に「国際障害者年から40年の軌跡」障害者権利条約に恥をかかせない」とある本書は、日本障害者協議会（JD）の代表である藤井克徳^{ふじいかつとく}さんが、主に1981年の国際障害者年以降の障害者運動の40年間を記憶と資料で、振り返って記録している一冊です。1981年から2020年までを、10年単位で第一期〜第四期としてくくり、その期間にあった主な出来事を背景と共に是非を問いながら解説しています。1981年以前に関しては、誰一人取り残さないの真逆である優生保護法に関する言及があります。



『障害のある人の分岐点』

不ばさ調査報告書

共用品推進機構では、前身の市民団体E&Cプロジェクトの発足時より、障害のある人、高齢者等日常生活に不ばさのある人達の不ばさ調査を行ってきています。主に全旨の人達を中心に93年に行った「視覚障害者アンケート調査報告書」（要約編）は、279名の回答のうち、点字での回答が213名（墨字が66名）でした。家の中では、家電、包装、配達物、家の外では、各種カード類、ATM、店、商品情報、外出、音・音声などに関する不ばさが数多く出ています。この調査で出てきた課題を解決するプロジェクトが作られ、JISが作られるきっかけになりました。



『視覚障害者アンケート調査報告書（要約編）』

共用品という思想

共用品推進機構の前身であるE&Cプロジェクトから今にいたる歩み、共用品の定義と原則、共用品の発想が生まれた背景、市場、共用品が日本で生まれた意味（必然性）、共用品への取組みがなぜ「思想」であるのか。共用品をめぐる「そもそも」を、開発と普及に関わってきた星川安之と後藤芳一が整理しました。現場で開発と普及を担当するとき、複雑な状況のもとで一歩先が必要なとき、他の社会課題を一から解こうとするとき、「応用」をめざすときは、原点を押さえることで答えが見つかるかも知れません。



『共用品という思想』

みんなで跳んだ

朝日新聞の記者、氏岡真弓^{うじおかまゆみ}さんが、1997年11月29日の夕刊コラム「変換キー」に書かれたのが「みんなで跳んだ」です。中学のクラス対抗、大縄跳びで、跳ぶのが苦手な生徒がいるクラスの話しあいを軸に、そのクラスの担任だった柏木修^{かしわぎおさむ}先生の目を通して状況を記録したドキュメントです。

クラス対抗の大縄跳びは、対抗という二文字があるように、勝つことが目的になっていきます。何度も話し合いを重ね、勝つこととは何か、みんなとは何か、大切なことは何かを、読み側に問いかけています。



『みんなで跳んだ』

杉並区民生委員・児童委員への調査報告書

調査の背景

民生委員とは、地域の身近な相談相手として、行政や関係機関と住民との間に立ち、支援をつなぐ役割をする人で、高齢者・障害者等だけでなく、相談対象が児童にも及んでいるため、児童委員も兼ねている。

私が一委員として参加している杉並区の差別解消支援地域会議では、令和2年度、同区に登録されている民生委員319名を対象に、次の項目でアンケート調査を行った。

- (1) 感謝・喜ばれたこと
- (2) 委員として良かった点
- (3) 困ったこと
- (4) 工夫したこと
- (5) その他、活動のなかで、多くの人に伝えたいこと

同会議の委員長は、実施の背景を「杉並区は以前『良かったこと調査』を杉並区在住の障害者に行い、イラスト化したパンフレットにまとめたところ、『ちよつとした思いやりが大切』『これならできる』との声が多

く寄せられた。このような可視化が誰にとつてもやさしい街につながるの考えから、調査対象を、障害者や高齢者に関わる機会の多い民生委員・児童委員に広げた」と語っている。

調査結果

令和2年11月～12月にかけて行った調査には、59%にあたる230名からの回答があった。委員歴は1年未満の人から30年近くになる人まで幅広く、課題に直面した際、戸惑いながらの工夫から、それらの工夫を積み重ね、自信を持つての行動まで、多様な状況にすることがわかった。

(1) 感謝・喜ばれたこと

以下、設問ごとに主な回答を記載する。

- ・話し相手になったこと、町などで声かけ、身近に民生委員がいることの安心感への感謝。
- ・素早いアドバイス及び、相談先の紹介などが感謝された。
- ・緊急時夜遅くに対応した事。

その他の回答からも、上下関

係のない、よい関係性が見受けられた。

(2) 委員として良かった点

- ・社会の仕組み、傾聴、高齢者とのふれあいで勉強。
- ・傾聴や手話の実践。
- ・障害者の顔見知りができた。
- ・頼りにされている実感。

その他、いい意味でおせっかくなったという回答があった。

(3) 困ったこと

民生委員に対する無理解、無理な要望(金・鍵・他)、相談の時間帯、頻度、コロナ禍での接し方、障害のある人とのコミュニケーション、拒否、安否確認、個人情報境界線、仕事との調整、民生委員の役割境界線、連携の有無(本人・民生委員・行政等)、情報が入ってこないなど、改善が望まれる事項についても回答があった。

(4) 工夫したこと

訪問先の事前確認、見かけたら挨拶、名札/名刺の提示、主に「聞く」を心がけている、御礼(品物等)への対処、一言書い

てポストイング、民生委員としてではなく、近所の奥さんで関わる、高齢者と話す時はゆっくり、大きな声で話すようにしている。笑顔で聞く、視覚障害者の誘導方法、等。

【まとめ】

回答には共生社会へのヒントが数多く示されている。代表的なヒントの一部を紹介する。

- ・街でもお互い挨拶をする。
- ・地域の人たちに関心を持ち、緊急時にも声をかける関係になる。
- ・自分だけでは解決困難な課題に直面したら、自分の思い込みで行動せず、本人や周りの人、機関と連携する。
- ・経験した失敗と共に良かったことも、他の民生委員並びに関係者、関係機関と共有する。
- ・ルールは守りながらも、安全を第一優先とする。
- ・共生社会構築のために、ルールは適宜見直す等である。

調査は活用して初めて意味が出る。有効な活用が楽しみだ。

星川安之

「できちよる先生」と「誰一人取り残さない」

製品の大量生産、大量消費は、製造業が業績をあげるための基本中の基本で、商品アイデア会議では、どれだけ優秀なアイデアよりも、どれだけ売れるかが常に、商品化を決定する基準でした。

私が学生の時、通っていた重度重複障害児の通所施設で、「この子ども達が遊べる市販の玩具は、とても少ない」という保育士の一言が、社会を知るきっかけとなり、また玩具メーカーに就職するきっかけにもなりました。

正義感が強かったわけではなく、中学・高校時代の数学教師が出題する応用問題を、教室で解いた時、彼が険しい顔をしながら発する「できちよる！」の一言で、問題が解けた時に得られた快感が、もう一つのきっかけとなりました。

大学に入るとユニークかつ壺にはまる評価をしてくれていた「できちよる先生」はおらず、印刷、引っ越し、喫茶店、百科事典の営業、牧場、道路の線引き、イベント、チラシ配り、家庭教師などの、アルバイトをしていく中で、障害児の通所施設に辿り着き、解いてみたい応用問題に出会ったのです。

「できちよる先生」が出題する問題との大きな違いは、どこにもこの問題を解くための参考書が売られていないことでした。

玩具メーカーに入社してすぐの頃、同期のメンバーと「良いおもちゃとは？」について、就業後に一杯飲みながら談義となりました。私から「障害があっても遊べるおもちゃ」と無邪気に言うと、同期の彼は、何を世間知らずに甘いことを言っているんだとの前置きの後、良いおもちゃとはを一言で

【事務局長だより】星川安之

「売れるおもちゃ」と言ったのを今でもはっきり覚えています。

入社半年後、新設された障害児のおもちゃを研究・開発する部署に配属になりました。最初からすべての子どもが遊べる玩具にするのは困難だと悟り、目の不自由な子供たちの玩具に絞り、専用の玩具を作っていたのです。「良いおもちゃ談義」を、思い出す状況はすぐにやってきました。1985年プラザ合意の円高で、輸出を行っていた企業は大きな打撃を受け、障害児専用活動する部署は存続の危機となり、選んだ道は、専用玩具ではなく、「売れるおもちゃ」の要素をもった、障害の有無に関わらず共に遊べる共遊玩具でした。この共遊玩具には、一社だけで行うのか？、さらには一業界だけでおこなうのか？、最後は日本だけで行うのか？という応用問題が付いてきたのです。

SDGsが国連で議論され、2030年までの目標をたて、持続可能な社会にすると共に、その時提唱されたのが「誰一人、取り残さず」という応用問題です。

共用品・共用サービスの目標と合致するのは、多くの関係者で、同じ方向を向きながら議論と実践を継続しておこなうことです。E&Cより前の風の会をふくめると、既に40年近くがたっています。

一人も取り残さずを実現するためには、一人でも多くの人が問題を解く側に回ることを思っています。



共用品通信

【委員会】

- 第2回TC159国内検討委員会（1月24日）
- 第2回アクセシブルサービスJIS原案作成委員会（1月26日）
- 第2回TC173/SC7国内検討委員会（1月27日）
- 第2回AD国際標準化委員会（2月4日）

【講義・講演】

- 大阪経済大学（1月7日、森田・星川）
- タカラトミー共用品講座第3回（1月13日、望月庸光・星川）
- 早稲田大学 藤本研究室（1月13日、星川）
- 生活協同組合（1月21日、星川）
- 東京都千代田区立九段小学校 オンライン授業（2月17日、森川）
- 杉並区大人塾 講座（2月27日、星川）
- 杉並区まち博 講座（3月5日、星川）

アクセシビリティリーダーキャンプ（広島大学）オンライン講義（3月2日、森川）

【報道】

- 時事通信社 厚生福祉 2月8日 マスクのJIS発行と展示会
- 時事通信社 厚生福祉 3月1日 共生社会を共にめざした友
- トイジャーナル 2月号 お客さんの身になってくれる店員さん達
- トイジャーナル 3月号 NPO法人ハイヒール・フラミンゴ
- 福祉介護テクノプラス 3月号 全ての人のニーズに応える公園に
- 福祉介護テクノプラス 4月号 あきらめない会社「川村義肢株式会社」
- 高齢者住宅新聞 1月5日・12日合併号 ダーツのルート
- 高齢者住宅新聞 2月9日 ビジネスホテルのシャワー室の椅子
- シルバー産業新聞 1月10日 非接触で生まれる工夫

アクセシブルデザインの総合情報誌 第137号
2022（令和4）年3月25日発行
"Incl." vol.23 no.137
The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2022
隔月刊、奇数月25日に発行
編集・発行（公財）共用品推進機構
〒101-0064
東京都千代田区神田猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページ URL：https://kyoyohin.org/

発行人 富山幹太郎
編集長 星川安之
事務局 森川美和、金丸淳子、松森ハルミ、木原慶子、田窪友和
執筆 落合早苗、後藤芳一、永礼欣也、原田由美子、松田崇弥
編集・印刷・製本 サンパートナーズ(株)
表紙 Nozomi Hoshikawa

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複製することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。